



# 九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.152

2010(平成22)年11月3日(水)発行

<1946(昭和21)年11月3日、日本国憲法の公布の日。現在は「文化の日」、元々は明治天皇の誕生日で、戦前には「明治節」という祝日。憲法発布は半年後の翌年5月3日。

<1949(昭和24)年11月3日、湯川秀樹博士(42歳)、日本人初のノーベル物理学賞を受賞> 敗戦の日本人に大きな希望を与えてくれた受賞でした。その後、湯川博士は世界の核廃絶運動に取り組むようになるため、特に晩年は日本政府からは疎まれることとなります。

## 日韓併合百年と原町の歴史(前編)

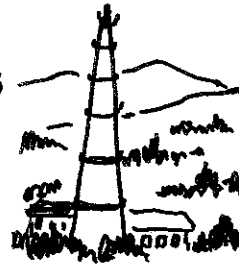
二上英朗

○ご承知のように、今年二〇一〇年は、日本が韓国を併合した一九一〇(明治四三)年から百年になります。そこで韓国(朝鮮の方々)と原町の関わりを、二上英朗さん(作家・郷土史家・福島市在住・本会会員)にお願ひし寄稿していただきました。原町に住んでいても知らない、隠された歴史です。一回に分けて掲載します。

若い頃、母校の原町高で現代詩の授業をしてきた時の事。二年男子のクラスで一人の生徒が質問に立ち「この人は日本人でしょ。それじゃ反戦の詩だなんて書く資格はない」と言った。それを書かないでどうする。文学に浪漫派や象徴主義もあるが、戦後文学の中で、この詩人はあんな言葉をついたのか。その時は理由が分からず、ただ五歳と年齢の違わぬ若い教員を「へこましてやれ」と絡んできたのだからと思っただ。少年らしい生意気な快感なら当方も持つていた。数年後に、ある少年をパチンコ店の裏に家庭訪問してそのエピソードを話したら「それは僕らの兄です。僕たちは在日二世なんです」と漏らした。「若い教員をやりこめてやった」と弟に漏らしていったという。父から貰ったという彼らの「國史」という日本語とハングルの両方の言語で印刷された国史から携の歴史教科書を取り出して「僕が興味ないから先生にあげるよ」と言っ、手渡した。激

烈な表現はない。日韓関係史を淡々と記述してあるだけであつた。ああ。あの兄は、あのととき彼なりに、精一杯の皮肉を投げかけたのだと思ひ知つた。彼らはパチンコ経営者の韓国人の父と、地元原町生まれの日本人の母との間に原町で生まれて原町で育ち、何から何まで同じ感覚のつもりでいた若者が、国籍は韓国。そういう隣人がいることを具体的にその時知つた。

私のデビュー作「原町無線塔物語」の取材で、建設当時に多くの朝鮮人が原町に住んでいて、土工として働いたことを知つた。塔が解体された昭和56年、NHKの番組作りで担当ディレクターと朝鮮人問題を扱うか議論した。朝鮮人という言葉を使つただけで激しい抗議が左から来たり、右からは脅迫が来ることさえあるという。私は郷愁と共同体意識をテーマとするシナリオにしたかつた。特定勢力のためにするつもりはないので、朝鮮人うんぬんは省いた。けれども建設に当たつた技術者やとび職を探し出してインタビューすると、マスコミ各紙の記者も群がって「朝鮮人はいたか」と、全員が集中質問するので、口を揃えて「朝鮮人はいなかった」と答える。おかしな話だ。土工として働いた佐藤啓助さんは「あの頃、朝鮮の方は原町にはたくさんおりました」と証言し、庶民は正直に事実を述べただけで作つた」という。朝鮮人が働いて、答えると、まずい事でも



(裏面につづく)

○来年1月9日(日)南相馬市成人式。原町区は「ゆめはっと」で13:30開式。来年も「憲法小冊子」を新成人に配布しますが、ご一緒に配布しませんか。(同日鹿島区10:00開式、小高区14:00開式)

あるのか。インタビューはなごやかに進行し、気心が通じてきた頃合を見計らって再び同じ質問をした。「朝鮮人はいきましたか」と。雰囲気は悪くなかった。彼らは答えた。

「そりやあ少しはいたさ。でも五、六人だったよ」

なあんだ。やっぱりいたんじやないか。何故隠すのか。戦前の教育を受けた世代には「朝鮮人」という単語はそれほど「政治的」タブーになつていた。

今年の日韓併合百年である。明治43年に大韓帝国は独立を失い、昭和20年に日本の敗戦によって「開放」された。韓国のカレンダーでは8月15日は祝日の赤丸印がついている。

前年の明治42年には大韓帝国の皇太子英親王が原町に立ち寄っている。ただし御料車の車窓から、同伴の伊藤博文と一緒に特別野馬追を現物した。英親王は十歳。軍服を着たかわいの子供である。伊藤公が父親代わりの保護者といつても、要するに韓太子は人質であつた。その伊藤博文が、まもなくハルビン駅で独立運動家安重根によつて短銃で射殺される。日本ではテロリストとされる彼は、韓国では英雄として賞賛されている。歴史認識のズレとして典型的な例である。おじいちゃんや孫のようないつツシヨットは、この原ノ町駅での場面が最後の姿であつた。

私たちの知らない、知らされていない、あえて知らずとしない、もう忘れてしまった原町の歴史です。

(次号に続きます)



<名歌>「地図の上 朝鮮国に黒々と墨を塗りつつ 秋風を聞く」石川啄木  
「壕跡に韓国二世たたずみて 『強制連行史』卒論にせんと」都築茂次郎

会報『九条はらまち』を読んで・会員の皆様からのご意見

◆◆◆「No.146裏面。「九条を守ろう・命の行進」の原町通過の絵がユニークで素敵なので、丸い小皿にして焼いてみます。リヤカーでのあの行動力に感動しています。今の政権では平和憲法は遠ざかっていきそうです。会報を読んで元気に過ごしたいです」◆◆◆「『九条を守ろう・命の行進』が原町通過の様子はインターネットで紹介されていましたよ」◆◆◆「No.146。サダム・フセインを裁判し死刑執行したのはイラク政府です。『アメリカがフセインを処刑』は事実には則してはいない。中立の見方をするよう慎重な記述が欲しい」◆◆◆「No.148裏面。私には坂本龍馬の良さが分かりません。人々がもてはやすほど、私は引いてしまいます。」◆◆◆「ドラマ『龍馬伝』など全く興味はなく一度も見ていません」◆◆◆「No.148裏面。坂本龍馬を会報でとりあげるのにふさわしいか、個人的に疑問を感じます。NHKドラマ『龍馬伝』の意図するもの、国民に刷り込もうとしているものは何でしょうか。龍馬が明治時代に生きていたらせいぜい海軍大臣かなと想像します」◆◆◆「10月の封書に印刷の井上ひさしに感心した。No.149裏面のタバコのピースのこと、『龍馬伝』の史実とドラマの比較などとても面白く、コピーしてあちこちに配りました」◆◆◆「No.146の映画『氷雪の門』樺太の真岡の女子電話交換手の一人は原町出身です。ご存知でしょうか。1974年の映画完成の時、遺族がインタビューされたりして話題になりました」◆◆◆「いつも『九条』と『はらまち』を交差させた内容で楽しみにしています」  
♥♥ご意見ありがとうございます♥♥いろいろと反省しきりです(事務局)♥♥



おふたみどろ  
太田緑子さん  
死去  
本県の医療・福祉発展に  
尽くす

○郡山市の太田綜合病院名譽理事長、元県教育委員長の太田緑子さんは十月二十二日、九十五歳で死去。太田さんは「福島県九条の会」の呼びかけ人代表で「憲法九条の堅持」を熱く訴え、講演会では「遺言状に憲法九条を守れと書こうか」と笑わせていました。○今年二月、映画『いのちの山河』をご覧になるため、わざわざ小高の浮舟文化会館にお出でになられ鑑賞されています。○三年前、福島市での「九条の会・井上ひさし講演会」の時は、私たちが発行した『憲法小冊子』を数冊買ってくれました。

「はらまち九条の会」事務局連絡先

- 会長：平田慶肇 TEL0244-24-1211
- 事務局長：山崎健一 〒975-0014南相馬市原町区西町3-53-2 TEL22-8631
- 会計：井上由美 TEL22-7511・FAX26-0892 ○石田賢二TEL22-4037
- 早坂吉彦 TEL22-0326 ○番場恵子 TEL22-0715



○この会報掲載用に、普天間・尖閣・北方領土問題など、会員の皆様の率直なご意見をお寄せください。